

(2) 項目別指摘率の特徴

*この(2)の文章で、印を付けた用語については、第4章 研究のまとめと今後の課題のP.32に説明をまとめて掲載しています。

ア 言語

(ア) 聞く (図(2) - 1、(2) - 2)

指摘率が最も高い項目は、小学生では「話し合いについていけないことがしばしばある」(73%)、中学生では「相手の話を聞いていないことが多い」(55%)です。

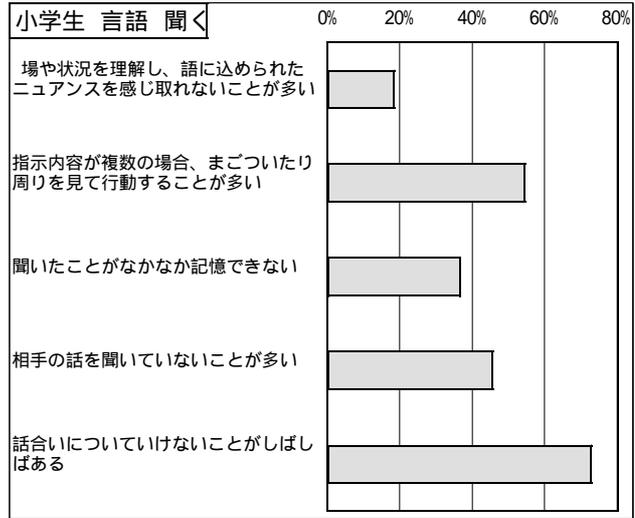
「話し合いについていけないことがしばしばある」は、中学生も49%で2番目に多く、これらは、聴覚的な認知の弱さによるか、欠席が多いために話し合いに参加できないからと考えられます。

また、「指示内容が複数の場合、まごついたり周りを見て行動することが多い」も半数以上の児童が指摘されています。

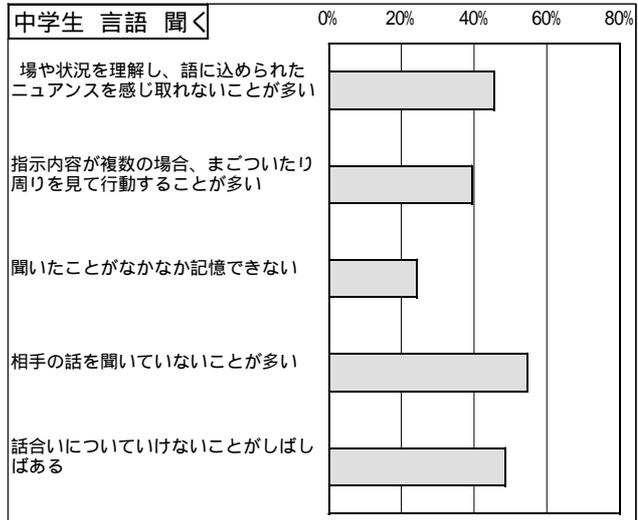
(イ) 話す (図(2) - 3、(2) - 4)

小学生の指摘率はこの分野では全般に低く、高くても27%であるのに比べて、中学生が「的確なことばを見つけられなかったり、詰まったりすることが多い」(36%)「話題に偏りがあったり、筋道なく思いつくまま語を並べて話す」(42%)の2項目が高くなっています。

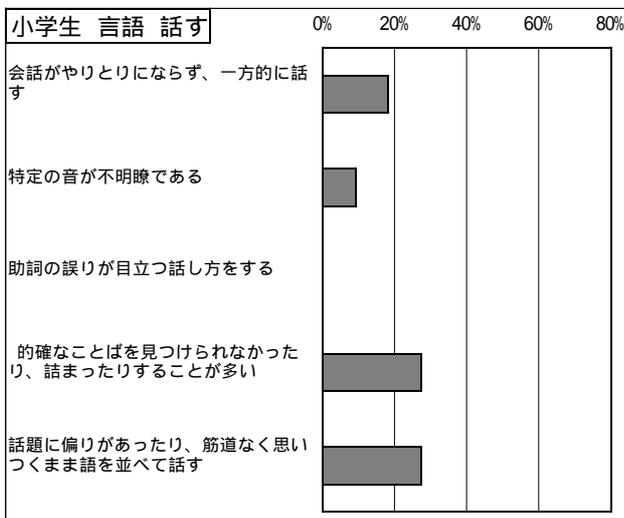
「助詞の誤りが目立つ話し方をする」は、小学生には見られないのに、中学生には6%と少ないですが見られます。



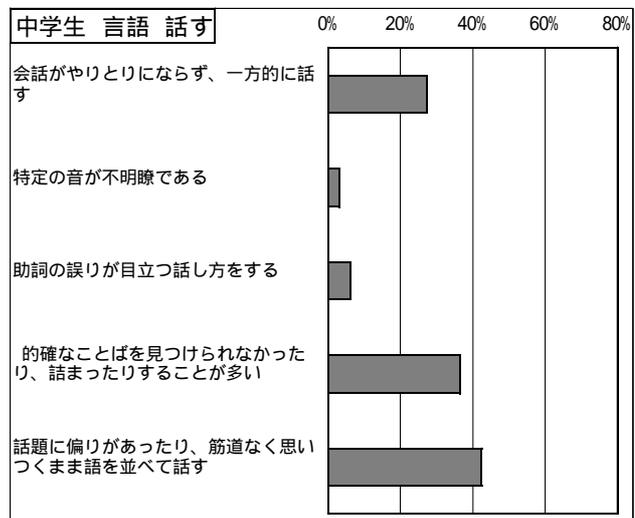
図(2) - 1



図(2) - 2



図(2) - 3

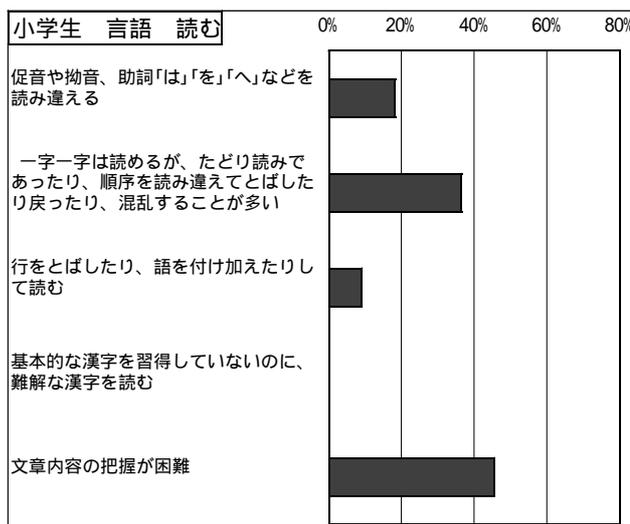


図(2) - 4

(ウ) 読む (図(2) - 5、(2) - 6)

「文章の内容を把握できない」は、多数が困難を指摘されていますが(小学生45%、中学生52%)、文章内容の把握は、言語に関する様々な力の総合を必要とするから、と考えられます。

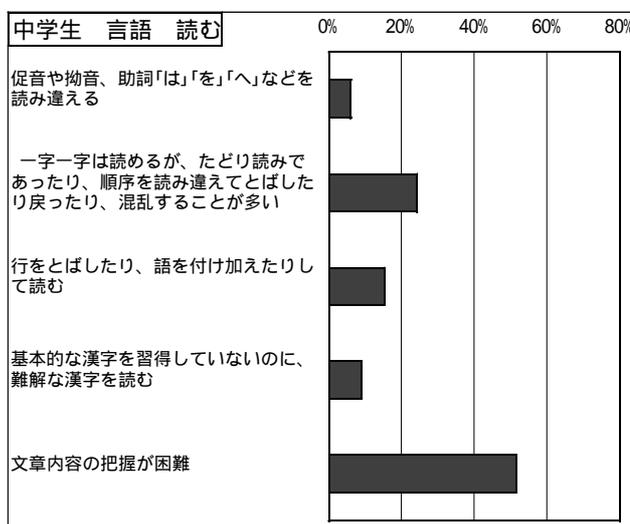
小学生も中学生も、「一字一字は読めるが、たどり読みであったり、順序を読み違えてとばしたり戻ったり、混乱することが多い」の項目が、指摘率はそれほど高くはありません(小学生36%、中学生24%)が、どちらも2番目に多い項目です。LDに見られる視覚認知の弱さが背景にあるかもしれません。



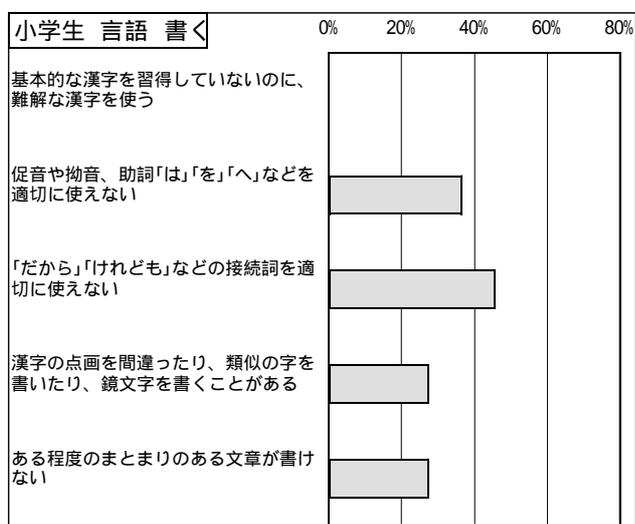
図(2) - 5

(I) 書く (図(2) - 7、(2) - 8)

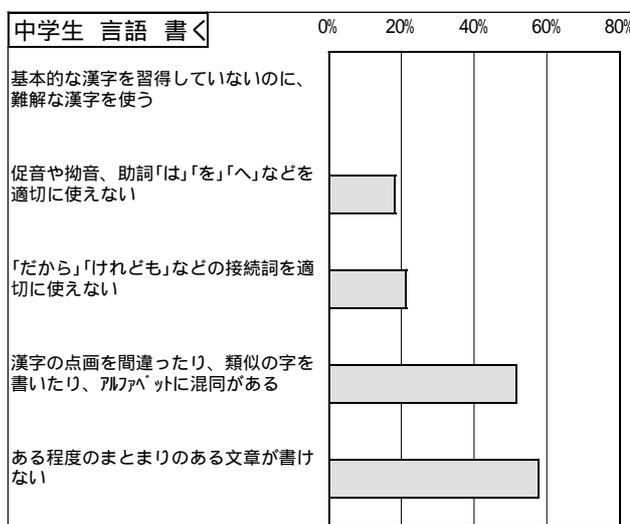
小学生では、「促音や拗音、助詞『は』『を』『へ』などを適切に使えない」(36%)「『だから』『けれども』などの接続詞を適切に使えない」(45%)の2項目が比較的高くなっています。それに比べて、中学生では「漢字の点画を間違ったり、類似の字を書いたり、アルファベットの文字に混同がある」(52%)「ある程度まとまりのある文章が書けない」(58%)が高いのが特徴です。聴覚や視覚認知面での困難がこれらの特徴に影響している可能性もうかがわれます。



図(2) - 6



図(2) - 7



図(2) - 8

イ 図形・数・日常生活での数に関する力等 (図(2) - 9、(2) - 10、(2) - 11)

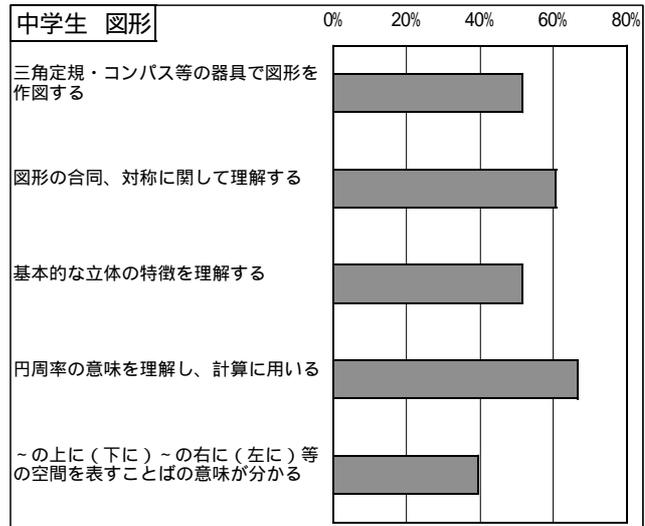
* 図形・数・日常生活での数に関する力等については調査項目を学年別に作成しています。抽出数が小学5年生6名、同6年生5名で、学年別の特徴を分析するには少なすぎるので、この分野の小学生の指摘率は算出せず、グラフも作成していません。

中学生は、この分野全20項目のうち、「百分率を用いた計算をする」「文章題を読んで立式する」等をはじめ、13項目で50%から70%台の高い指摘率です。中でも、次の6項目は65%以上です。(「円周率の意味理解と計算」(67%)「小数の乗法・除法計算」(70%)「分数の乗法・除法計算」(67%)「多操作計算問題」(67%)「変化する数量間の関係の表やグラフで表現」(67%)「数学の用語・記号・求積の公式の使用」(73%))

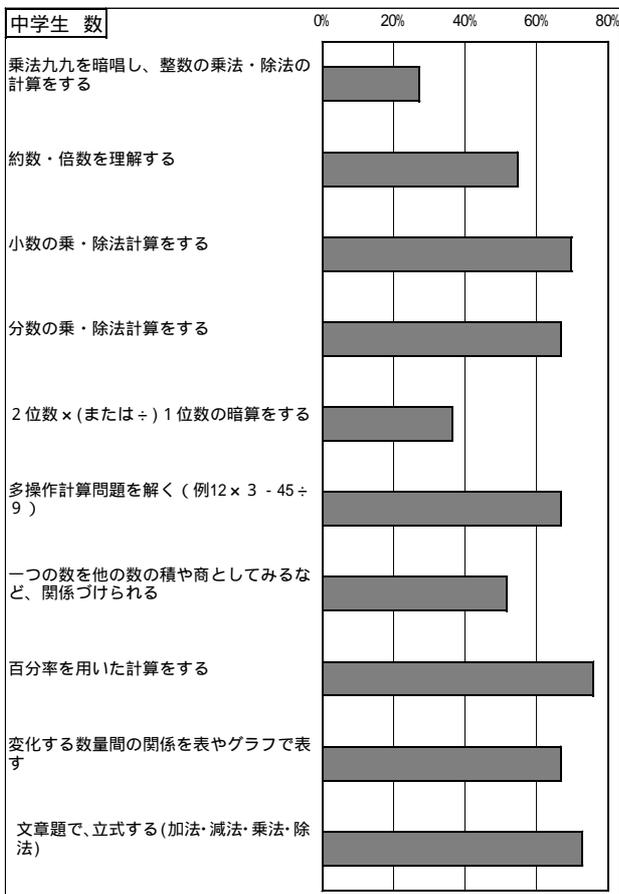
これらは、日常生活よりもむしろ授業で学習し習得する項目です。LD的な空間認知や推論などの面での弱さが学習でのつまずきの背景にあり、不登校等につながったかもしれません。また、不登校等による学習空白が、学習困難を増加させているとも言えます。

日常生活での数に関する力等の項目では、「数学の用語・記号・求積の公式の使用」を除いて、指摘率が比較的低くなっていますが、これは生活の中で学習が補われているからではないかと考えられます。日常生活で比較的使うことの多い「空間を表すことば」「乗法九九」「2位数×(÷)1位数の暗算」の3項目が比較的低いのも同じ理由によるものと考えられます。

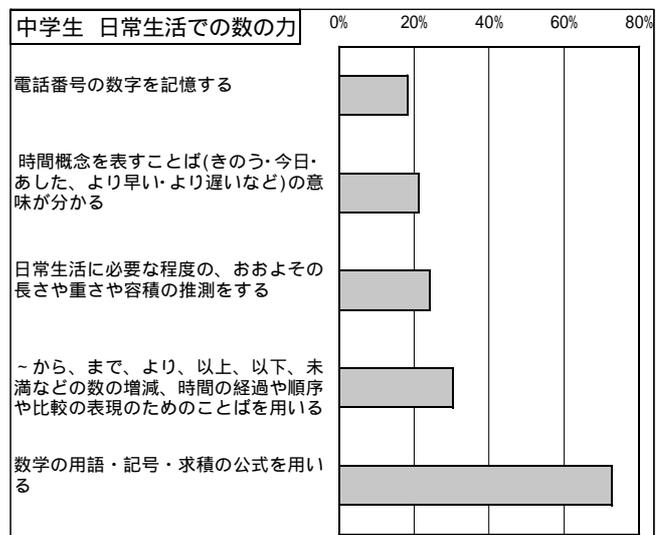
いずれにせよ、この分野の特徴は、早期からの対応だけでなく、LD的な特徴に配慮した援助・指導が必要なことを強く示唆しています。



図(2) - 9



図(2) - 10



図(2) - 11

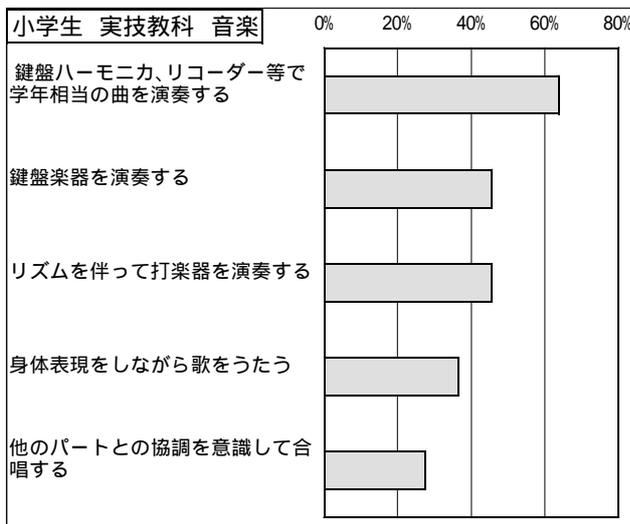
ウ 実技教科

(ア) 音楽 (図(2) - 12、(2) - 13)

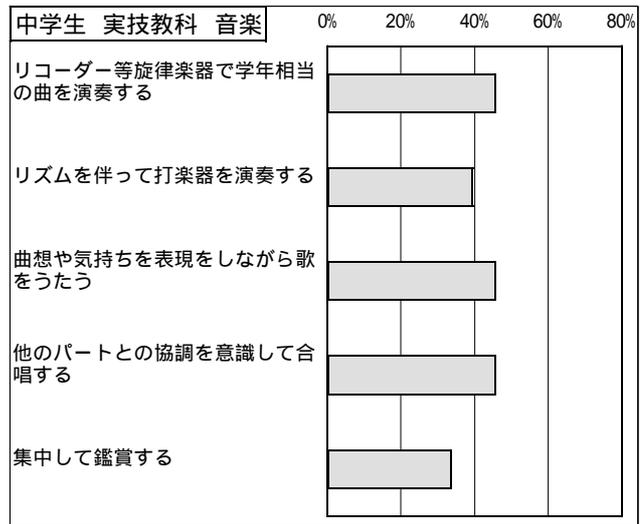
中学生は、全5項目が30%から40%台で目立った特徴がありませんが、小学生では、「鍵盤ハーモニカ、リコーダー等で学年相当の曲を演奏する」が64%もあるのが目立ちます。欠席による学習空白の影響がはっきり現れていることがうかがえます。

演奏、合唱や合奏等この分野の項目は、「表現」や「協調性」等社会性の一面に強く関係しています。その弱さが、不登校等の児童生徒の「社会的、情緒的に未熟」などの性格傾向によるのか、LD的な背景をもつものなのか、より詳しい分析が必要です。

京都府総合教育センター教育資料 昭和63年度第3号「学校教育相談の手引 - 登校拒否の予防と援助・指導 - 」P.14



図(2) - 12

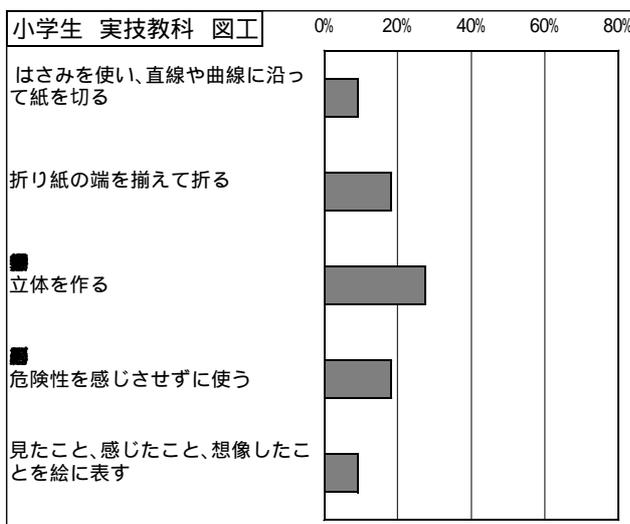


図(2) - 13

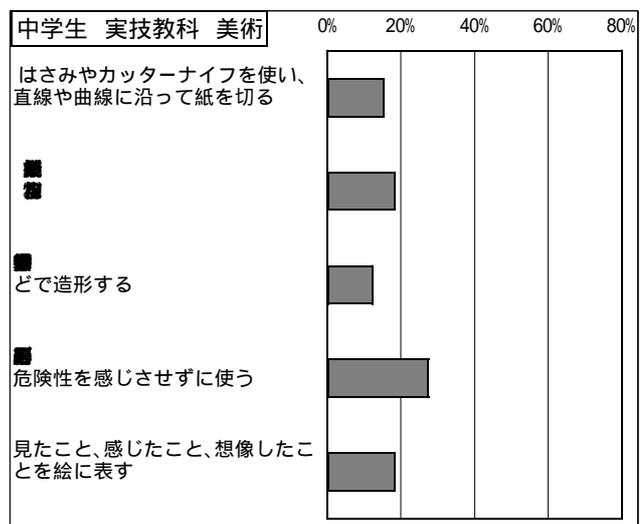
(イ) 図工・美術 (図(2) - 14、(2) - 15)

図工・美術は、小学生も中学生も指摘率は比較的低くあまり顕著な特徴は見られません。小学生では、「手指、掌等を十分働かせて、粘土で立体を作る」が最も高く(27%)、中学生では、「彫刻刀、小刀、のこぎり等の道具を危険性を感じさせずに使う」が同じく最も高く27%です。

「折り紙」「はさみの使用」などの「手先の器用さ」に関係する他の項目を含めて、表現力の弱さの背景の考察については、音楽と同様に、不登校等の児童生徒の性格傾向やLD的背景について精査が必要です。



図(2) - 14



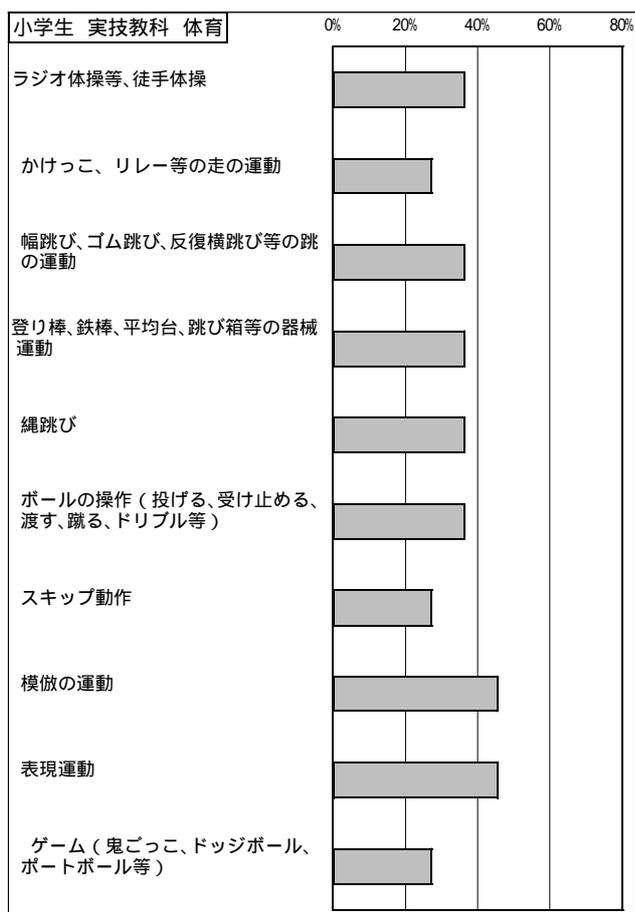
図(2) - 15

(ウ) 体育 (図(2) - 16、(2) - 17)

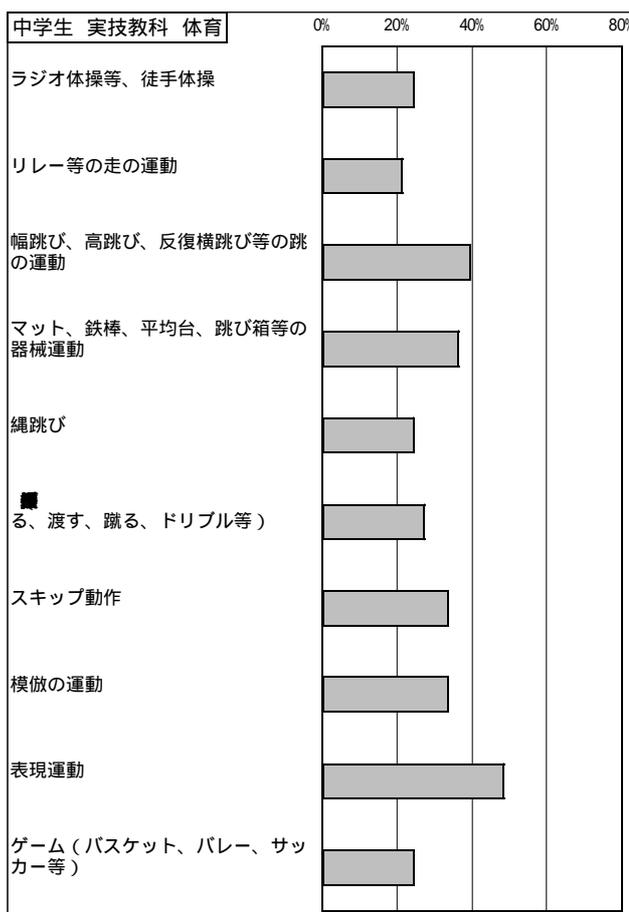
体育では、小学生で「模倣の運動」「表現運動」が45%で高い指摘率ですが、他項目は20から30%台にとどまります。

中学生では少しばらつきが見られ、「表現運動」が49%で比較的高いのを除くと、他は20から30%台ですが、「走の運動」よりも、「跳の運動」「器械運動」や「スキップ動作」「模倣の運動」など協調運動的な身のこなしを要するものが高くなっています。

「表現運動」の高い指摘率についても、音楽、図工、美術と同様に、「表現力」の背景について詳しく調べてみる必要があります。



図(2) - 16

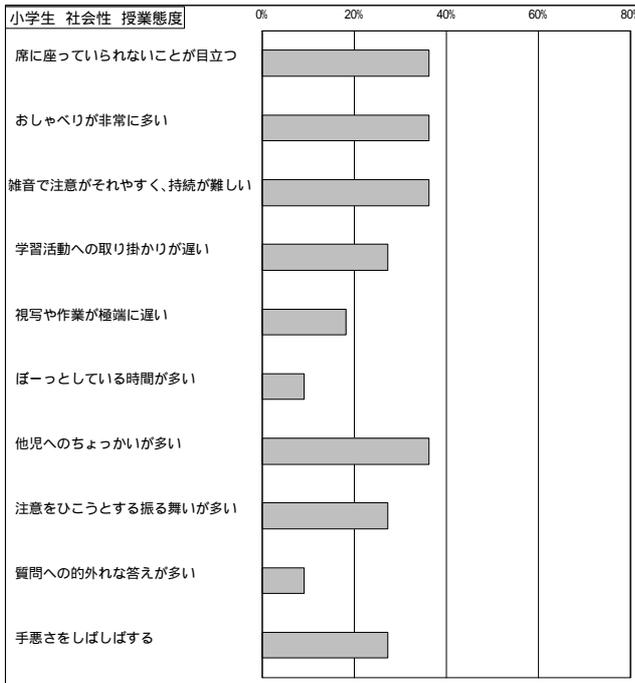


図(2) - 17

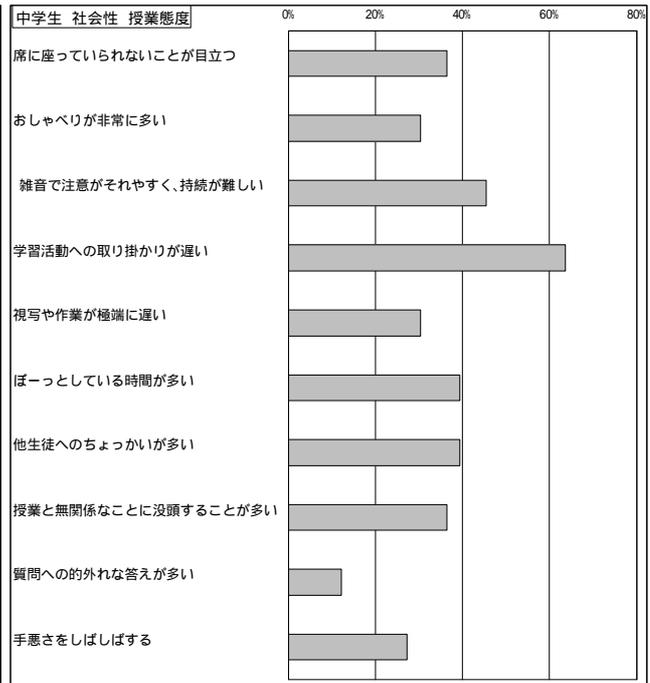
エ 社会性・行動 (図(2) - 18 ~ (2) - 23)

小学生では、50%を超える項目がなく、指摘率の高い項目が「机の中、ロッカーの中がとても乱雑である」「偏食、過食、少食などが著しい」「物をよくなくしたり、壊したりする」(3項目とも45%)で生活習慣の3項目に集中しています。

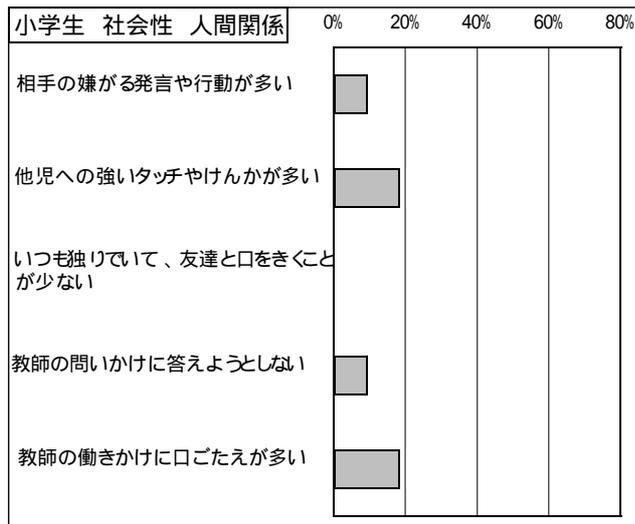
それに比べて、中学生では50%以上の項目として、授業態度の「学習活動への取り掛かりが遅い」(64%)、生活習慣の「忘れ物が非常に多い」(55%)が見られ、人間関係の「教師の声掛けや働きかけに対して、過敏であったり攻撃的な反応をしめしたりすることが多い(逆に、答えようとしなかったり、消極的反応が多い)」も49%あります。認知面でのつまずきを背景として、生活年齢が高くなるとともに二次的な課題も重なっている生徒が多いのではないかと考えられます。



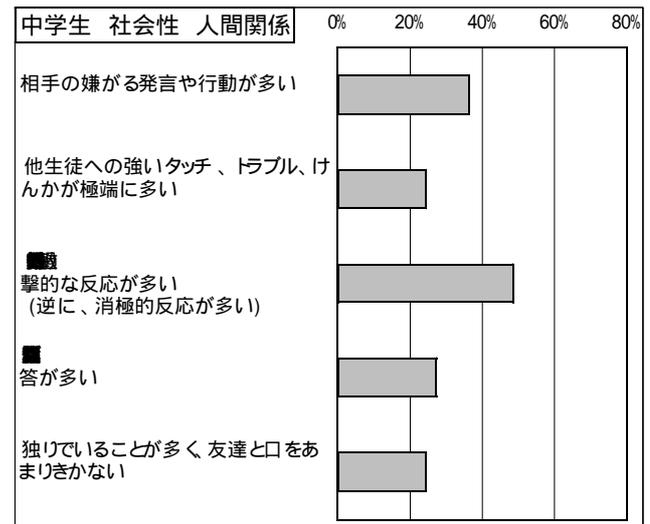
図(2) - 18



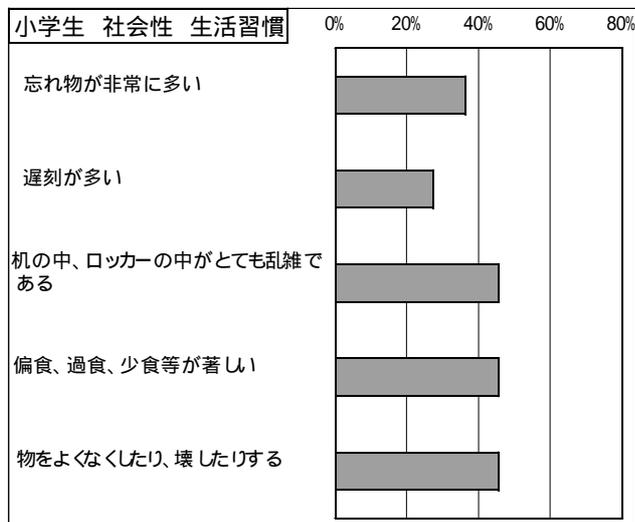
図(2) - 19



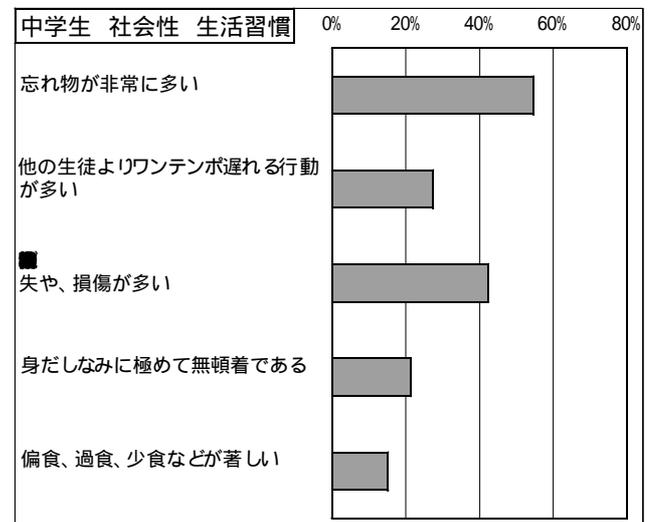
図(2) - 20



図(2) - 21



図(2) - 22



図(2) - 23